

ベトナムの侍

異国の地で日々奮闘するその姿は、まるで「サムライ」のよう。なぜベトナムに行き着いたのか。その志しを支えているものは何なのか。静かな熱を秘めたサムライの姿や、プライベートな一面を追った。

vol.8



KOBAYASHI
NAOYUKI

身体の不調や悩みを日本語で相談でき、適切な治療が受けられる安心感が魅力の、東京インターナショナルクリニックの小林院長。

医者を目指したのは高校生のころ。必ずしも医者という職業にこだわっていたというわけではなく、より人に役立つということを考えた時に、日本よりも医療資源の少ない場所で医療活動を行うのがいいだろう、という発想からだったという。イメージとしては、戦火が飛び交うような、圧倒的に医者や医療資源の少ない貧困地域で、医療以外の人道的支援をすることも頭にあったそう。

「今なら、ペシャワール会(*パキスタンで医療だけでなく、水源確保、農業支援なども行う国際NGO団体)のような活動もあるかと思いますが、当時はまだ日本に国境なき医師団も設立されていないような時代。医学部の入試の時には、面接官に“そんなことできるわけがない”と、こっぴどく言われましたね。私と同じように、30%ぐらいの学生は、人の役に立ちたい、貢献したい、ボランティア的なことをやりたいという志を持って入学するんですけど、いつしか理想から現実路線に変わり、日々の生活に追われたりで、6年後卒業する頃には皆、純粋なものを失っちゃうんですね。」

そんな周りの流れとは逆行し、自身の中の想いは消えることがなかったと言う。卒業後、大学の医局で睡眠時間もままならないような環境の中、技術を磨き、知識を蓄えた。そして、2001年、国境なき医師団の一員としてスリランカへ。その後、数年間でナイジェリア、アフガニスタン、パキスタン、9.11後のNYなど、日本と海外を行ったり来たりする生活を送った。

【プロフィール】

小林直之 1965年、東京都の世田谷に生まれる。高校生の頃に、海外での人道的医療支援を志し、医学部へ進学。卒業後は慶應大学の外科に所属、2001年より国境なき医師団に参加、スリランカやナイジェリア、アフガニスタンなどで活動を行う。2014年8月に「東京インターナショナルクリニック」の院長として渡越。

結果的に小林院長の人生を変えることになったのが、2011年3月11日、東日本大震災だという。

「ビジネスとしてクリニックをやるというのは、本来、私のスタイルじゃないんです。体が衰えて外科手術ができなくなるまでは、日本である一定の期間働きながらお金を貯めて、1ヵ月ぐらい海外で医療活動。そんな生活スタイルを思い描いていたんですけど、急激に日本の社会状況が変わってきて…。3.11以降、放射能汚染に対する対策、海外への兵器輸出、徴兵制など、これまで私たち国民が信じて疑わなかった、日本政府の“危険な本性”が明らかになってきましたよね。徴兵制で国民を戦地に送り、兵器を売ることで儲けて。“美しい国”とキレイ事を言いながら、日本は非常識・無慈悲・無節操な国になっているんです。広島や長崎の惨禍をすべて忘れて、原発を再起動。あれあれあれっという間に、戦争に自ら飛び込んでいく国…。そんな流れの中、思い切ってハノイに来ました。ベトナム語や文化を学び、医者としてベトナム在住の日本人の方々の支援をしながら、失墜しつつある日本の国際的信用を回復するよう奮闘したいという思いが常にあります」。

医療や国のあり方に対する熱い想いを語る小林院長の目の奥には、医者を目指した少年の頃と変わらない、熱い炎が燃えているように感じられた。

